

特別支援学校の性教育における指導内容と
児童生徒に期待する姿

古賀 精治・御手洗 沙織

Expected Images of Pupils or Students, Achievement Goal in Sexuality Education
in Special Support Schools

KOGA, Seiji and MITARAI, Saori

大分大学教育福祉科学部研究紀要 第37巻第1号

2015年4月 別刷

Reprinted From

THE RESEARCH BULLETIN OF THE FACULTY OF

EDUCATION AND WELFARE SCIENCE,

OITA UNIVERSITY

Vol. 37, No. 1, April 2015

OITA, JAPAN

特別支援学校の性教育における指導内容と児童生徒に 期待する姿

古賀 精治*・御手洗 沙織**

【要旨】 本研究は特別支援学校の性教育実施状況に関する調査を行い、指導内容と教師が児童生徒に期待する姿の関連について分析した。被調査者は特別支援学校7校に勤務する教員224名であった。結果は以下の通りであった。(1) 実施内容については「身だしなみ」や「身体の清潔」など「日常生活の指導」として性教育が行われることが多いことがわかった。また学部が上がるにしたがって実施内容が多様化することも示された。(2) 児童生徒に期待する姿については「周囲の人との好ましい人間関係」が最も多かった。このことから特別支援学校では性教育をする際、人間関係を重視していることが示唆された。(3) 実施内容と期待する姿の関連については、同じ内容であっても学部によって異なる姿を期待していることが明らかになった。

【キーワード】 特別支援学校 性教育 期待する姿

I. 問題と目的

近年、障害のある子どもに対する性教育の在り方が変容してきた。「精神薄弱者が健常者と同じように第二次性徴を迎えていることは過去の研究からも明らかであり、ノーマライゼーションの理念の浸透に伴い、障害児・者のセクシュアリティを人権としてとらえる視点が広がっている(山本, 1991)。しかし親や専門家の中には”どうして、あえて寝ている子を起こすようなことをするのか”(Linda et al., 1983)と言う批判も少なくなく、このような親の意識が性教育の障壁になっていると考えられる。さらに21世紀初頭に政治問題化した性教育パッシング等(山田・水内, 2010)も、障害のある子どもへの性教育実施に対して暗い陰を落としている。

ところで橋本ら(2011)は日本の中学校における性教育の現状を調査している。この調査によると、中学校では「思春期の身体の変化」、「妊娠・生命の誕生」、「性感染症」という項目が

平成26年10月31日受理

*こが・せいじ 大分大学教育福祉科学部学校教育課程(特別支援教育コース)

**みたらい・さおり 大分大学大学院教育学研究科学校教育専攻特別支援教育専修

8割以上で実施されていることが示唆された。特別支援学校での性教育もこれらの内容を指導することは必要だと考えられる。加えて障害のある児童生徒では「排泄・着替えの仕方」や下着を見せないという「身だしなみ」の指導等を学齢期にきちんと行っていないと、子どもが大人になったときに性に関する問題行動としてあらゆる問題が顕在化してくる可能性がある。このように特別支援学校においては性教育を広義に捉え、将来に向けて指導していくことが必要である。

特別支援学校における性教育の調査として、例えば加瀬・井上・吉川（1990）、宮原・相川（2000）、山田・水内（2010）、河田・佐藤（2012）等がある。これらの調査では性教育の内容や性教育の成果を明らかにし、性教育を実施していない理由や実施する上での困難点が挙げられている。しかしこれらは質問紙の項目毎に分析がなされており、項目間にどのような関連があるかの分析までは至っていない。前述したように特別支援学校では性教育を広義に捉えているため、実際の授業の中ではねらいとする指導目標と指導内容が複雑な関係を示しているのではないかと考える。本研究においてはとりわけ性教育の指導によって教員が「児童生徒に期待する姿」と実施する「性教育の内容」の関連性を検討する。教員が「児童生徒に期待する姿」によって実施する指導内容も異なると考えられる。さらに特別支援学校の特徴の一つに小学部1年生から高等部3年生までの幅広い年齢層の児童生徒が在籍しているということがある。このことから教員の期待する姿は、発達段階の違いによって異なっている可能性があるため、より詳細に検討する必要がある。これらのことから性教育の内容や児童生徒のどのような姿を目指して指導しているのかということ、また発達段階の違いという点に着目することで、より特別支援学校における性教育の実施状況が明確になると考えられる。

本研究では特別支援学校における性教育の実施状況について調査するとともに、項目間にどのような関連性があるかを分析することを目的とする。

II. 方法

1. 調査対象

A県内の特別支援学校7校（視覚・聴覚を除く）に勤務する教員のうち、学級担任（1学級より1名）の224名。

2. 質問紙の作成

加瀬・井上・吉川（1990）、宮原・相川（2000）、井上・菊池・遠藤（2010）、山田・水内（2010）、河田・佐藤（2012）の研究を参考に質問紙を作成した。質問紙は「性教育」として行っているものを前提として以下の項目について回答を求めた。項目は①性教育の実施内容、②実施理由、③指導形態、④指導場面、⑤児童生徒に期待する姿、⑥成果、⑦困る性的行動の内容、⑧保護者からの要望、⑨性教育の必要性、⑩必要な理由、⑪性教育を実践しやすくする方法であった。またフェイスシートとして対象者の学部、性別、年齢、教員経験年数の回答を求めた。

②、③、④、⑤、⑦、⑪に関しては選択肢の中から当てはまるものすべてを選び、さらに順位をつけるという複数選択法の要素と順位法の要素を含む質問項目とした。①は無制限複数選択法、⑥は「大きな成果があった」から「まったく成果はなかった」までの6件法であり⑧と⑨は「ある」「ない」の2件法の評定尺度法、⑩は自由回答法で回答を求めた。

3. 手続き

各学校へ電話連絡にて協力を依頼した。研究の目的に同意された学校へ質問紙を配付した。配付と回収の方法は「手渡し」と「郵送」の2通りであった。

Ⅲ. 結果と考察

224人に配付し、201人から回答があった。回収率は89.3%であった。内訳を表1に示す。すべての項目に不備のないものは170部で75.9%であった。

表1 質問紙の配付数と回収数

	小学部	中学部	高等部	計
配付数	77	63	84	224
回収数	68	56	77	201
有効回答数	56	51	63	170

1. 性教育の実施内容

実施内容は「身だしなみ」、「身体の清潔」、「身体の名称」などの18項目から選択した。複数選択可であった。教員1人が平均何項目選んだかをみるために各学部の教員1人あたりの選択平均項目数を算出し、その結果を表2に示した。

表2 1人の教員が選択した実施内容の項目数の平均

小学部	中学部	高等部
3.4	5.6	5.6

小学部は3.4項目であったが中学部と高等部では5.6項目に増加

している。中学部、高等部では実施内容を多く取り上げていることがわかる。このことから全体的に実施内容の項目数は増加していることがわかり、高等部段階へ発達していくにつれて、実施内容も多様になっていることが伺える。

各学部の回答の中でそれぞれの実施内容を選んだ人の割合を表3に示した。表3をみると小学部において最も多かったのは「身だしなみ」であった。次に「身体の清潔」が多くなっていた。これはいわゆる「日常生活の指導」として行われることが多い実施内容であり、実際に指導場面として「日常生活の指導」に位置づけられていることが多かった。2位までは全学部通して同じであったが、3位以下は様々な違いが認められた。

そこで各学部間の変化を検討するため小学部から中学部、中学部から高等部の変化を表3に矢印で示した。なお10%未満の変化はほぼ等しいと見なし「≒」とした。3位は小学部と中学部では「排泄の仕方」で、高等部では「男女交際」であった。高等部では中学校段階まで通常の中学校に在籍していた生徒が入学することから、「男女交際」の選択肢が中学部と比較して2倍以上に増加と考えられる。また小学部で「性被害、性加害」や「妊娠、出産」、「性交」等の指導を実施している教員はいなかった。小学部から中学部にかけて増加しているのは7項目、減少しているのは1項目であり、中学部から高等部にかけて増加しているのは5項目、減

少しているのは2項目であった。

表3の割合の変化とその実施内容を簡潔にまとめたものを表4に示した。小学部から高等部まで通して変化していない項目が最も多く6項目であった。次に小学部から中学部にかけて増加している項目が4項目、中学部から高等部にかけて増加している項目が3項目で、小学部から高等部にかけて増加している項目が2項目であった。表4からもわかるように小学部から中学部、中学部から高等部と増加している実施内容が多く、減少している内容はわずか3つであった。このことから高等部に上がっていくにつれて、実施内容も徐々に増加するということがわかる。中学部から高等部にかけて増加している3項目は年齢相応の実施内容となっており、発達段階に応じた指導がなされていると考えられる。例えば知的障害のある生徒が性被害、性加害や正しい知識をもたないまま性交に及んでしまうことが社会的にも問題となっている。そのような背景からもこれらの項目は高等部において増加しているのではないかと考えられる。また小学部から高等部にかけて増加し続けている項目はあるが、減少し続けている項目はないことが特徴である。「排泄の仕方」は中学部から高等部にかけて減少している項目であるが、これは高等部段階になる前に定着することから高等部では実施されていないと考えられる。

表3 性教育の実施内容を選んだ人の割合(%)

	全体	小学部	中学部	高等部
身だしなみ	80.1	72.1 ① ↗	89.3 ①	≒ 80.5 ①
身体の清潔	66.7	60.3 ② ↗	76.8 ② ↘	64.9 ②
身体の名称	47.3	55.9 ④ ↘	42.9 ④	≒ 42.9 ④
排泄の仕方	45.8	57.4 ③ ≒	51.8 ③ ↘	31.2 ⑦
男女交際	31.3	1.5 ⑪ ↗	28.6 ⑥ ↗	59.7 ③
男女の身体のしくみ	30.8	10.3 ⑩ ↗	39.3 ⑤	≒ 42.9 ④
命の尊さ	24.9	22.1 ⑤ ≒	26.8 ⑨	≒ 26.0 ⑪
月経、精通	4.4	11.8 ⑨ ↗	28.6 ⑥ ↗	32.5 ⑥
友情、愛情	24.0	13.2 ⑦ ↗	28.6 ⑥	≒ 31.2 ⑦
第二次性徴	18.9	1.5 ⑪ ↗	23.2 ⑩	≒ 31.2 ⑦
家族について	15.9	16.2 ⑥ ≒	16.1 ⑫	≒ 15.6 ⑬
生まれた時のこと	14.4	13.2 ⑦ ≒	17.9 ⑪	≒ 13.0 ⑮
性被害、性加害	13.4	0.0 ⑭ ≒	8.9 ⑬	↗ 28.6 ⑩
妊娠、出産	11.4	0.0 ⑭ ≒	8.9 ⑬	↗ 23.4 ⑫
性交	7.5	0.0 ⑭ ≒	5.4 ⑯ ↗	15.6 ⑬
マスターベーション	7.5	2.9 ⑬ ≒	7.1 ⑮	≒ 11.7 ⑯
避妊	4.5	0.0 ⑭ ≒	1.8 ⑰	≒ 10.4 ⑰
AIDS	1.5	0.0 ⑭ ≒	0.0 ⑱	≒ 3.9 ⑱

*複数回答可. 丸数字は各学部における順位を示す.

表 4 実施率の変化とその実施内容

小	中	高	項目	
≡	≡		命の尊さ 生まれた時のこと 避妊	家族について マスターベーション AIDS
↗	≡		身だしなみ 友情, 愛情	男女の身体のしくみ 第二次性徴
≡	↗		性被害, 性加害 性交	妊娠, 出産
↗	↗		男女交際	月経, 精通
↗	↘		身体の清潔	
↘	≡		身体の名称	
≡	↘		排泄の仕方	

*10%未満の変化は「≡」とする。

2. 性教育実践によって期待する姿

「周囲の人との好ましい人間関係」、「自分を大切にする」などの期待する姿の質問項目は複数選択法と順位法に基づいて作成した。選択された項目に付された順位に関して、1位を5点、2位を4点、3位を3点、4位を2点、5位を1点、選択されなかった項目を0点と換算し、その平均値を算出した。その結果を表5に示した。

期待する姿は小学部から高等部までほとんど同じ順になった。「性教育」実施というと実際の現場では性に関する授業や性的な問題行動が起きたときに実施されることが多いと考えられるため「性に対する理解」や「問題行動の変容」が上位に挙がることが予想されたが、実際は「周囲の人との好ましい人間関係」が3.7と一番高かった。このことから特別支援学校の教員は「性教育」を単なる性の教育ではなく、人間関係を築く上で重要な実施内容であると考えていることがわかる。

次に各学部間の平均値の変化を検討するため小学部から中学部、中学部から高等部の変化を表5に矢印で示した。なお0.5未満の変化はほぼ等しいと見なし「≡」とした。

表 5 性教育実施により児童生徒に期待する姿の平均値

期待する姿	全体	小学部	中学部	高等部
周囲の人との好ましい人間関係	3.7	3.1	↗ 4.2	↘ 3.7
自分を大切にする	3.2	3.1	≡ 3.3	≡ 3.3
自立(自己管理)	2.4	3.0	↘ 2.4	↘ 1.8
性に対する理解	1.5	1.1	≡ 1.2	↗ 2.2
問題行動の変容	1.2	1.1	≡ 1.0	↗ 1.5

*0.5%未満の変化は「≡」とする。

小学部、中学部、高等部を通して平均値がほぼ変わらなかったのは「自分を大切にする」である。「周囲の人との好ましい人間関係」は小学部から中学部にかけて急激に増加するが、中学部から高等部にかけてゆるやかに減少している。また「自立（自己管理）」は小学部から高等部にかけて減少しており、その代わりに「性に対する理解」と「問題行動の変容が」中学部から高等部にかけて増加している。特に高等部における「性に関する理解」は「自立（自己管理）」を上回るほど急増しており、高等部において期待する姿が徐々に変化してきていることがわかる。

3. 期待する姿と実施内容の関連

期待する児童生徒の姿と選択された実施内容を検討するため実施内容の項目毎に、その項目を選んだ教員が児童生徒に期待する姿の平均得点を算出し、「周囲の人との好ましい人間関係」は表 6-1、「自分を大切にする」は表 6-2、「自立（自己管理）」は表 6-3、「性に対する理解」は表 6-4、「問題行動の変容」は表 6-5 に示した。表 3 において実施率が 10%未満だったものは省いている。

表 6-1 「周囲の人との好ましい人間関係」を期待している教員が実施した内容毎の平均順位

内容	平均	小学部		中学部		高等部
家族について	4.1	3.9	↗	4.4	↘	4.1
身体の名称	.9	3.4	↗	4.4	↘	3.8
男女の身体のしくみ	3.9	3.8	↗	4.3	↘	3.7
生まれた時のこと	3.8	3.4	↗	4.2	↘	3.9
身だしなみ	3.7	3.1	↗	4.2	↘	3.7
排泄の仕方	3.7	3.3	↗	4.1	↘	3.8
命の尊さ	3.7	3.5	↗	4.2	↘	3.5
身体の清潔	3.6	3.1	↗	4.3	↘	3.3
月経、精通	3.6	3.1	↗	4.4	↘	3.2
友情、愛情	3.5	2.4	↗	4.4	↘	3.6
男女交際	4.1			4.4	↘	3.7
第二次性徴	3.0			4.2	↘	3.3
マスターベーション	3.4					3.4
性被害、性加害	3.3					3.3
妊娠、出産	3.1					3.1
性交	3.0					3.0
避妊	3.0					3.0
総平均	3.7	3.1		4.2		3.7

*1 位を 5 点、2 位を 4 点、3 位を 3 点、4 位を 2 点、5 位を 1 点、無選択を 0 点と換算。

表 6-1 より「家族について」の内容が「周囲の人との好ましい人間関係」を最も期待して実施されていることがわかる。「家族について」から「避妊」までのすべての内容の平均が 3.0 以上の得点となっており、すべての内容が「周囲の人との好ましい人間関係」を期待して実施さ

れているともいえる。また表 5 において「周囲の人との好ましい人間関係」は中学部で一度上昇し高等部で下降するということがわかっていたが、表 6-1 をみるとすべての内容が中学部で一度上昇し高等部で下降するということが改めてわかった。

表 6-2 「自分を大切にする」を期待している教員が実施した内容毎の平均順位

内容	平均	小学部		中学部		高等部
生まれた時のこと	4.2	3.8	↗	4.6	↘	4.2
男女の身体のしくみ	3.8	4.5	↘	3.2	↗	3.7
命の尊さ	3.8	3.8	≡	3.8	↗	3.9
家族について	3.6	2.4	↗	4.1	↗	4.2
身体の名称	3.4	3.0	↗	3.9	↘	3.2
身だしなみ	3.2	2.4	↗	3.8	↘	3.3
身体の清潔	3.1	2.5	↗	3.2	↗	3.5
月経, 精通	3.1	1.9	↗	3.5	↗	4.0
排泄の仕方	2.7	2.5	↗	2.7	↗	2.9
友情, 愛情	2.7	1.0	↗	3.5	↗	3.6
男女交際	3.6			3.6	↘	3.5
第二性徴	3.5			3.5	≡	3.5
避妊	4.3					.3
妊娠, 出産	4.1					4.1
性交	4.1					4.1
性被害, 性加害	3.7					3.7
マスターベーション	3.4					3.4
総平均	3.2	3.1		3.3		3.3

*1 位を 5 点, 2 位を 4 点, 3 位を 3 点, 4 位を 2 点, 5 位を 1 点, 無選択を 0 点と換算。

表 6-2 をみると「生まれた時のこと」の合計点が最も高く、「自分を大切にする」ことを期待して実施されていることがわかった。表 3 において上位の「身だしなみ」や「身体の清潔」等の内容はやや平均値を下回っており、あまり上位ではなかった「男女の身体のしくみ」、「命の尊さ」、「家族について」、「身体の名称」の内容が平均値を上回っていることは、「自分を大切にする」の特徴であると考えられる。

表 6-3 をみると「排泄の仕方」が最も多い値となっている。これは「排泄の仕方」を指導する際に教員は「自立（自己管理）」ができるようになってほしいと望んでいると考えられる。実際に小学部から高等部にかけて値が下降しているので「排泄の仕方」は学部があがるにつれて身についていくことが想像できる。

表 6-4 をみると「月経, 精通」が多くなっている。さらに小学部から高等部にかけて値が上昇していることから、高等部になっても「性に対する理解」を期待して実施されているといえる。「月経, 精通」という内容は表 6-3 の「自立（自己管理）」を期待する姿において、中学部から高等部にかけて下降していた。しかし表 6-4 の「性に対する理解」では前述したように上

表 6-3 「自立（自己管理）」を期待している教員が実施した内容毎の平均順位

内容	平均	小学部		中学部		高等部
排泄の仕方	2.7	3.1	↘	2.9	↘	2.0
命の尊さ	2.6	3.0	↘	2.6	↘	2.1
身だしなみ	2.4	3.1	↘	2.5	↘	1.5
友情，愛情	2.4	2.9	↘	2.0	↗	2.3
身体の清潔	2.3	2.8	↘	2.6	↘	1.4
月経，精通	2.3	2.3	↗	2.4	↘	2.3
生まれた時のこと	2.2	3.2	↘	1.7	↘	1.6
身体の名称	2.0	2.4	↘	1.7	↗	1.9
家族について	2.0	2.1	↘	2.0	↘	1.8
男女の身体のしくみ	1.9	2.0	≒	2.0		1.7
第二次性徴	2.0			2.0		1.9
男女交際	1.7			1.7		1.7
性交	2.8					2.8
避妊	2.5					2.5
性被害，性加害	2.0					2.0
妊娠，出産	2.0					2.0
マスターベーション	1.6					1.6
平均	2.4	3.0		2.4		1.8

*1位を5点，2位を4点，3位を3点，4位を2点，5位を1点，無選択を0点と換算。

昇している。これは「月経，精通」という内容を「自立（自己管理）」ではなく、「性に対する理解」を期待して行われているということになり，同じ内容であっても教員の意図が違っていると期待する姿も異なるということを表している。また「性に対する理解」は「命の尊さ」と「身体の名称」を除くすべての内容で小学部よりも中学部で，中学部よりも高等部で高くなっていることから，高等部になると「性に対する理解」が期待されるということが考えられる。

表 6-5 をみると表 6-3 同様「排泄の仕方」が多くなっている。また「友情，愛情」も同等の点数になっている。「排泄の仕方」は高等部であっても平均点より高い値となっており，小学部だけでなく高等部段階において「排泄の仕方」が問題行動につながっているということが示唆された。なお今回の調査項目に「性的な問題行動が生起しているか」を問うものも含まれていた。そこでは「問題行動が生起している」と答えた人のほとんどが「性器いじり」を問題行動として挙げていた。しかし実施内容の「マスターベーション」は高等部であっても 0.9 と低い値であり，「問題行動の変容」には反映されていない結果となっている。このことは「性器いじり」が指導まで至っていないことや，「性教育」としては実施していないということが考えられる。今後は実際に生起している行動と実施内容の関連についても検討していく必要があると考えられる。

表 6-4 「性に対する理解」を期待している教員が実施した内容毎の平均順位

内容	平均	小学部		中学部		高等部
月経, 精通	2.2	1.4	↗	2.6	↗	2.7
男女の身体のしくみ	2.0	1.7	↗	2.0	↗	2.4
命の尊さ	2.0	1.0	↗	2.6	↘	2.5
身体の名称	1.7	1.2	↗	2.1	↘	1.9
生まれた時のこと	1.7	1.1	↗	1.6	↗	2.4
身体の清潔	1.6	1.0	↗	1.4	↗	2.3
友情, 愛情	1.6	0.8	↗	1.5	↗	2.4
身だしなみ	1.5	0.9	↗	1.3	↗	2.2
排泄の仕方	1.4	0.9	↗	1.4	↗	2.0
家族について	1.2	0.6	↗	0.7	↗	2.2
第二次性徴	3.3			3.1	↗	3.5
男女交際	2.7			2.6	↗	2.8
妊娠, 出産	2.9					2.9
性交	2.8					2.8
性被害, 性加害	2.7					2.7
避妊	2.5					2.5
マスターベーション	2.4					2.4
総平均	1.5	1.1		1.2		2.2

*1位を5点, 2位を4点, 3位を3点, 4位を2点, 5位を1点, 無選択を0点と換算.

表 6-5 「問題行動の変容」を期待している教員が実施した内容毎の平均順位

内容	平均	小学部		中学部		高等部
排泄の仕方	1.5	1.6	↘	1.3	↗	1.6
友情, 愛情	1.5	1.9	↘	1.2	↗	1.5
身体の名称	1.3	1.2	↘	1.0	↗	1.6
身だしなみ	1.2	1.2	↘	1.0	↗	1.4
身体の清潔	1.2	1.0	↗	1.2	↗	1.3
生まれた時のこと	1.2	0.9	↗	1.2	↗	1.5
男女の身体のしくみ	1.1	0.8	↗	1.2	↗	1.4
命の尊さ	1.1	1.0	↗	1.3	↘	1.0
家族について	1.1	1.2	↘	0.7	↗	1.4
月経, 精通	0.9	0.7	↘	1.2	↘	0.8

第二性徴	1.1			1.0	↗	1.2
男女交際	1.1			1.0	↗	1.2

性被害, 性加害	1.5					1.5
マスターベーション	0.9					0.9
避妊	0.8					0.8
妊娠, 出産	0.7					0.7
性交	0.7					0.7
総平均	1.2	1.1		1.0		1.5

*1位を5点, 2位を4点, 3位を3点, 4位を2点, 5位を1点, 無選択を0点と換算。

4. 他の質問項目の結果

本研究では教員が児童生徒に期待する姿と実施内容にどのような関連があるかを分析することを中心としているが, 質問紙には他にも質問項目があった。その結果を以下に示した。

性教育の指導形態については「個別指導」などの6項目より複数選択可で回答を求めた。結果を表7に示した。すべての学部で個別指導が一番多いという結果になった。割合を見ると小学部の43.7%に対し高等部では28.7%まで減っている。これは高等部になると「保健体育」という教科の時間ができることや, 学年別, 男女別などの指導が増えることにより個別指導の割合が減少したのだと考えられる。

性教育の指導場面については「日常生活の指導」などの5項目より複数選択可で回答を求めた。結果を表8に示した。すべての学部で日常生活の指導の場面での指導が多いという結果になった。休み時間(昼休みも含む)や自立活動の時間などすべての教育活動の場面で指導されていることがわかる。また前述のとおり高等部になると教科の時間ができるため, 保健体育等の教科の時間の割合が小学部と比較してかなり増加していることがわかる。

表 7 性教育実施時の学部毎の指導形態の割合 (%)

	小学部	中学部	高等部	計
個別指導	43.7	32.3	28.7	34.6
学年別	14.4	27.9	22.0	21.3
男女別	8.2	11.2	21.3	14.1
学級別	22.4	9.5	10.6	14.1
知的発達でのグループ	3.2	8.3	13.3	8.6
学部全体	8.1	10.9	4.0	7.3

表 8 性教育実施時の学部毎の指導場面の割合 (%)

	小学部	中学部	高等部	計
日常生活の指導	54.0	47.8	40.3	47.1
休み時間（昼休みを含む）	23.0	21.6	14.2	19.3
自立活動の時間	20.6	9.9	18.2	16.6
保健体育等の教科の時間	1.5	19.5	22.1	14.4
放課後	0.9	1.3	5.2	2.6

表 9 性教育実施の成果（変容）の割合 (%)

大きな変容があった	3.6
変容があった	24.9
やや変容があった	58.5
あまり変容がなかった	11.9
変容はなかった	1.0
まったく変容がなかった	0.0

性教育実施の成果（児童生徒の姿の変容）の有無を「大きな変容があった」から「まったく変容がなかった」までの6段階で回答を求めた。結果を表9に示した。一番多かったのは「やや変容があった」の回答であった。「大きな変容があった」から「やや変容があった」の割合と「あまり変容がなかった」の割合を比較すると、87.0%と12.9%となり、性教育を実施することで児童生徒

の姿の変容を実感している教員が多いということがわかる。

困る性的行動について「性器いじり」、「異性への身体接触（胸）」などの9項目から当てはまるものへの回答を求めた。複数選択可であった。学部毎の困る性的行動の内容の割合を表10に示した。すべての学部で共通して一番多かったのは「性器いじり」であった。割合をみて

表 10 学部毎の困る性的行動の内容の割合 (%)

	小学部	中学部	高等部
1位	71.1 性器いじり	72.7 性器いじり	53.2 性器いじり
2位	26.3 性器露出	30.3 月経の手当て	34.0 異性への身体接触(胸)
3位	18.4 トイレ覗き	24.2 異性への身体接触(胸)	14.9 月経の手当て
4位	15.8 異性への身体接触(胸)	15.2 異性にいたずら	14.9 異性にいたずら
5位	13.2 人前で自慰	12.1 トイレ覗き	12.8 性器露出
6位	7.9 月経の手当て	9.1 異性への身体接触(性器)	4.3 スカートめくり
7位	5.3 異性にいたずら	9.1 人前で自慰	4.3 トイレ覗き
8位	2.6 異性への身体接触(性器)		4.3 人前で自慰
9位			4.3 異性への身体接触(性器)

も、どの学部においても「性器いじり」が50%以上を占めていた。他にも「異性への身体接触(胸)」は学部があがるにつれて割合が増えていた。「性器いじり」や「月経の手当て」などに比べ、「異性への身体接触」や「性器露出」、「異性にいたずら」という行動は学校の中では単なる問題行動と一括りで考えられているが、社会に出ると「犯罪」となる可能性がより高くなる行動である。児童生徒を性加害者にしないためにも、高等部を卒業するまでの間に徹底した指導を行う必要がある行動だと考えられる。

性教育の必要性について「必要である」と「必要ではない」の二者択一で回答を求めた結果、「必要である」と回答した人が99.5%とほぼ全員であった。その理由を自由記述で求めたところ「どの子どもにも必要な教育であるから」(59.2%)が一番多かった。その他に、小学部では「自立するため(32.8%)」、中学部や高等部になると「将来(45.9%)」や「社会生活を営むため(40.2%)」という回答も多かった。また「性被害に遭わないように(29.3%)」、「性加害者にならないように(19.2%)」という回答もあった。さらに知的障害があるからこそ、「プライベートゾーンを教えること(7.2%)」や「自慰の仕方を教えなければならない(6.5%)」という回答もあった。そのためには、教師側も指導するための知識を得る必要があるといえる。

IV. 今後の課題

本研究の調査対象の学校に在籍する児童生徒には知的障害と肢体不自由等を重複した児童生徒が含まれていた。単一の知的障害児と重複障害児の指導の仕方は異なることから、それぞれ別々に調査する必要があると考えられる。

また今回の研究で取り上げた実施内容は、さらに具体化することが望ましいと考える。その理由を一番実施率の高かった「身だしなみ」を挙げて説明する。「身だしなみ」という内容であっても「下着を見せない」等の性を意識した指導と純粋に「寝癖は整える」というような身だしなみの指導では教師の期待する姿や指導の方法が異なることは明白だからである。これらを明確にするためにも実施内容の具体化をする必要があると考える。

引用文献

- 1) Linda, Hilary, Frank, Ann, Michael, Jean, Pauline, Winifred, Paul, Lona, June, Robert, Maidwyn & Marjore (1983) *Sex Education & Counselling for Mentally Handicapped People*. University Park Press, USA, 田川元康 (1987) 精神遅滞児 (者) と性教育. 岩崎学術出版社, 1-41
- 2) 橋本紀子・篠原久枝・田代美江子・鈴木幸子・広瀬裕子・池谷壽夫・良香織・小宮明彦・渡部真奈美・茂木輝順・森岡真梨 (2011) 日本の中学校における性教育の現状と課題. 教育学研究室紀要: 「教育とジェンダー」研究, 9, 3-20.
- 3) 山田晃生・水内豊和 (2010) 特別支援学校における性教育に対する意識と実態: 国立大学法人の附属特別支援学校の教諭ならびに養護教諭を対象とした質問紙調査から. 富山大学人間発達科学部紀要, 5(1), 49-64.
- 4) 山本直英 (1991) 性の人権教育論. 明石出版, 東京, 26-30.
- 5) 加瀬進・井上美園・吉川かおり (1990) 障害児性教育研究, 23, 3-55.
- 6) 河田史宝・佐藤春香 (2012) 金沢大学人間社会学域教育学類紀要, 4, 15-29.

Expected Images of Pupils or Students, Achievement Goal in Sexuality Education in Special Support Schools

KOGA, Seiji and MITARAI, Saori

Abstract

This study investigated the current status of sexuality education in special support schools. I conducted analysis on relationships between instructional contents and goals teachers expected their students to achieve. The survey was conducted with 234 teachers who work in seven special support schools. The following results were obtained. (1)As regards instruction contents, it was found that the teachers often conduct sexuality education as “the instruction of daily life”, such as "appearance" and "cleanliness of the body". Also, it was also found that instructional contents became diverse as their grades advanced.(2)As for the image of pupils or students the teachers expect to have, "those who have good relationships with people around them” was preferred. This suggests that sexuality education in special support schools attaches great importance to interpersonal relationships.(3)Regarding relationships between instructional contents and the image of pupils or students, the teachers were found to have different images depending on the faculty which they teach at, even though teaching the same content.

【Key words】 Special support school, Sexuality education, Expected images of pupils or students, Achievement goal